

(個別研修) 鳥居いづみ

研修テーマ：知的障害を持つ人が地域で暮らすための環境整備とサービス提供について
－サービス提供分野の垣根を超えた連携、地域とのつながり－

研修地：スウェーデン スtockホルム市

研修日：5月2日～5月5日

JAG (パーソナルアシスタント協会)



中心部にある JAG の本部

JAG は 1992 年設立の非営利団体で、パーソナルアシスタントの育成、派遣、デイケアセンターなどを運営。

JAG はパーソナルアシスタントの利用者が会員となり、団体運営上の決定権を持っている。会員は現在約 400 名、パーソナルアシスタントを約 4000 名雇用している。非営利団体としては最大規模である。本人がニーズをうまく説明できない場合も多いが、何かを決めるときには必ず本人も同席し、意見を尊重するようにしている。また、予算を削減されないよう、政治的な活動にも力を入れ、YouTube など活動の様子を積極的に PR している。



音楽やストレッチなどの運動ができる

パーソナルアシスタントの利用者で、設立メンバーの一人であるマグヌスさんは、アシスタントの雇用条件として仕事ができるかどうかよりも感覚的に合う人を重視しているとのこと。またアシスタントの方は、以前は認知症患者の施設で働いていたが、利用者さんとの個人的な関係を築き、より意味のある仕事をしていると感ぜられる今の仕事に魅力を感じているようだ。

アシスタントは人により雇用している人数が異なり (2~20 人)、24 時間体制でサポートしている。利用者 とアシスタントがコミュニケーションをスムーズにかわせるようになるには、1 年ほどかかるそうである。

Adolf Ratzka 氏（スウェーデン自立生活運動の先駆者、パーソナルアシスタント利用者）インタビュー



広いリビングルームを案内してくださる Ratzka 氏



エレベーターも完備

パーソナルアシスタント制度をはじめ、障がい者に関する様々なサービス・制度について定めた LSS 法の施行から 30 年。この間に変わったこととして

- ① 自分のことを自分でするということがパーソナルアシスタント制度の普及で当たり前になった
- ② LSS 法に基づく支給額が年々増加し、パーソナルアシスタントを使える人が少なくなっている
- ③ パーソナルアシスタントを使えないことで、親の考えが「自分で面倒をみる」「グループホームを作ってほしい」に変わってきている

などを感じているとのこと。

ハビリテーリングセンター

ラテン語の habil（生きる・有能な・役に立つ）から生まれた「リハビリテーション」（回復）に対し、障害を「元に戻す」のではなく、その時点からの発達に目を向ける意味で「ハビリテーリング」という。

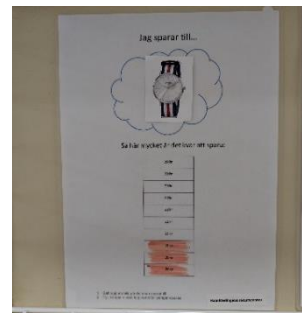
ハビリテーリングセンターはストックホルム地域に 17 あり、障害がある子供から成人までに対する様々な支援（申請の手伝い、医療・教育・就業等に関する情報提供）を行っている。子供の支援、成人の支援のほか、社会に障害に関する知識を広めるための役割もある。



生活場面に応じた練習（玄関）



痛みの伝え方



時計を買うための貯蓄額

Ersta Diakoni (グループホーム)



Ersta は病院などを運営する非営利の組織。4 年前にできたグループホームを訪問し、利用者の方と職員の方にお話を伺った。

一人ひとりの部屋にバスルーム (洗濯機付き) があり、キッチン、リビング、寝室がワンルームの中で設置されている。部屋は広々として、それぞれが好きな家具などを持ち込み思い思いにコーディネートしていた。(写真は、個人用キッチン)

グループホームは、自治体が個人の申請に基づき入居を決めるため、ホーム側ではどのような利用者が入るかわからないため、メンバー構成によっては支援が難しいこともあるとのこと。こちらのホーム利用者は比較的若く状態像も似ていて、グループでの活動が実施しやすいそうだ。

Hökarängsskolan (特別支援学校)



この学校には、通常の学校と特別支援学校が同じ建物の中に設置されている。特別支援を受ける生徒は7クラスに59人が在籍している。この学校でヘッドティーチャーとして教えるサリネン先生 (写真右) に授業の一部を見せていただき、その後お話を伺った。

面談等で保護者の意向を聞き気持ちによりそっていくことを大切にしているとのこと。また、現在の先生のクラスの生徒たちは、パーソナルアシスタントを雇用することが難しい (自力歩行可能、意思疎通できるなど) ため、社会性を教え、集団の中でいかに行動できるかにも力を入れている。しかし、受け持つクラスの生徒の状況により、教える内容、教え方が異なるので日々難しい課題があると話されており、自分も学び続けていかなければならないと強く感じた。

MISA (障がい者就労支援団体)



30 年前に設立された就労支援団体。日本でいう就労移行支援、障害者就業・生活支援センター、ジョブカフェなどの機能を持っている。独自の ISA メソッド (職場での個別支援) で、作業に関する明確な指示、同僚との関係を築く社会的な支援などを行っている。コンピューター等メディアの長時間使用によるひきこもり、違法行為をした方などの支援も行っている。

スウェーデン国内外にも支部があり、総職員数は200人に上る。毎年4~5日の合宿を行い、職員の交流に努めている。費用は掛かるが、投資であるとのオーナーの言葉に福祉の団体というよりは IT 企業のようなエネルギーを感じた。(写真は MISA 本部事務所。奥の部屋で訓練・面談中)